
銀河英雄伝説異聞 ヤンとゲイルの物語

お富

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説異聞 ヤンとゲイルの物語

【Nコード】

N3120X

【作者名】

お富

【あらすじ】

歴史変動が起きた。何者かが、歴史上の人物に介入して歴史を変えたのだ。時間管制官ゲイル・アベイの捜査が始まる。犯人を捕らえ、歴史を修正して正史に戻すだけのはずが、事態は予想外の展開に。

ヤンが生き延びたもうひとつの歴史編と、ゲイルの活躍するタイムパトロール編、二つの物語が始まります。

第一部 プロローグ（前書き）

この作品は、同人誌として発表された「ヤンとゲイルの物語」総集編上より、お富が担当した作品を加筆再構築したものです。

第一部 プロローグ

突然だった。目の前の空間が揺らめいたと思ったら、そこに男が立っていた。

同盟の軍服でも、帝国の軍服でもない。見たことの無いデザインだが、何かの制服らしきものを身につけている。

ヤンは幻覚かと思ったが、足の痛みがそれを否定していた。背を壁に預けて座り込んだヤンの足は、先程、襲撃者のブラスタの標的にされて、血がにじんでいた。大した負傷ではないが、ジクジクと痛くて無視できない。

陸戦隊あたりの兵士に言わせれば怪我のうちに入らないんだろうな。鼻で笑われそくだ。

ああ、なんか思考が現実逃避ぎみだ。我ながら平静を失ってるなあ。

「ヤン・ウエンリー、私はゲイル・アベイ」

上から見下ろす男の声には、わずかな訛りがあった。

「君は誰だ。私を殺しに来た一味だろうけど」

それしか無いだろうとヤンは思ったが、名乗った男は思いもよらぬ反応を示した。

「違う。私は地球教徒ではない。私は未来から来た。時間旅行者だ」

ヤンはポカンと口を開けた。そのいかにも間の抜けた表情に、ゲイルは張り詰めた神経がわずかばかり緩むのを感じた。

「どうか聞いてくれ。私は、ヤン・ウエンリーがここで暗殺された

歴史の未来から来た。けれどそれは、我々がこの場でとどめをさすから成立する未来だ。ヤン・ウエンリーが生き残った世界も存在できることを、私は知っている」

ゲイルは言葉を切って、ヤンに理解する時間を与えた。
ヤンがゆつくりと口を閉じた。

「信じてもらえるか。今ここでヤン・ウエンリーを殺さなければ、私と、私の属する世界全てが消える。そうなることが正しいのかどうか、私には分からない。選んでくれ、どちらの未来を選ぶのか」「どちら、と言つと」

ゲイルはあえて単純化して話した。

ヤンの死後、残されたフレデリカ・グリーンヒル・ヤンとユリアン・ミンツが、ハイネセン共和政府を樹立する道。そしてもう一つの道は……………。

奇跡のヤンが身震いした。

男の話は突拍子もないものだった。だからこそ、ヤンは男が真実を話していると信じた。嘘を吐くなら、もっと真実味のある嘘をつくだろう。襲撃者の一味なら、こんなまどろっこしいことをする理由がない。それこそあっさり殺されるだけだ。

「……………私が死ねば、帝国と共和政府の平和共存が来るんだね」

ゲイルが頷いた。それが達成されるまでに、皇帝ラインハルトとユリアン・ミンツの間で、多くの血が流されることになるとは言わなかった。

「フレデリカ……………」

ゲイルには、自分がヤンの決断を誘導していると自覚があった。都合の良いことだけを強調し、都合の悪いことは教えない。アンフエアだ。

分かっているながら、そうせざるをえなかった。ゲイルは時間管制官、歴史を修正する義務がある。

「それで、私の死因は何なんだい」

ヤンの声は、不思議なほど静かだった。

「地球教徒に左足を撃たれ、失血死する。救援に来たユリアン・ミンツが、遺体を発見した」

ゲイルは、あくまでも事務的に答えた。

「そう、か。地球教徒ね。皇帝ラインハルトではないわけだ」

通路の向こうから、遠い声が響いてきた。

それはまだ若く、必死に師父の名を呼んでいた。

第一部 プロローグ（後書き）

始めてしまいました。

すいません、皇帝ヤンのお話がなかなか進まないのので、思い切って気分転換します。

ゲイル君が行き詰ったら、皇帝ヤン陛下が活躍してくれそうな予感がひしひしとしています（^^）

第二部 発端（前書き）

まずはゲイル君のお話からスタートです。

第二部 発端

完成本部長室のドアをノックした時、ゲイル・アベイの気分はうんざりに近かった。ルーティン業務から引き離されて呼び出しを受けるのは、これで何度目だろう。どうせまた、厄介事を押し付けられるに違いない。

「入りたまえ」

本部長の太い声がして、ドアが開いた。正面のデスクでふんぞり返っているのが、我らが愛すべき上司様だ。

「時間管制官ゲイル・アベイ少佐、参りました」

形式通りの敬礼をして、ゲイルは室内を見回した。意外な事に、他に誰も居ない。

「掛けたまえ。今回の任務は極秘事項だ。君を見込んでの抜擢だ。期待しとるよ」

見え透いたお世辞を聞き流しながら、ゲイルは勧められたソファに腰を下ろした。即座に体形に合わせて変形するそれに体重を預ける。

言いたいだけ言っていれば良いんだ。どうせ苦勞するのはあんたじゃなくてこつちなんだから。

「また歴史犯ですか。今度は何時の時代です」

「さすがに察しが良いな。今回はかなり遡るぞ。宇宙歴八百年だ」ゲイルが低く口笛を吹いた。

「なんと、未だ人類が故郷の銀河を離れていない時代ですか。前銀河歴時代は私の守備範囲外ですが」

本部長がじろりとゲイルを見た。

中肉中背、黒に近い茶色の髪と、皮肉っぽい光をたたえた青灰色の目。充分成熟しているが、中年と呼ぶには早かるう。時間管理局の中ではピカイチのやり手だ。

過去に不法介入しようとした時間犯の逮捕数は、すでに三ケタに乘せている。時間犯より悪質な歴史犯がらみの事件を解決した実績までである。それも四件という驚異的な数だ。

「前銀河歴時代を専門にしとる者はおらん。そもそも古代歴史調査局の管轄で、時間管理局の守備範囲外だからな」

ゲイルの表情に、わずかばかり好奇心が浮かんた。

仕事から、第三銀河と第六銀河の間で起きたルーシヤンの戦い以降の歴史は詳細に記憶しているが、前銀河歴時代となると、白紙に近い。人類がたった一つの銀河さえ征服していない時代とは、どんなものだろう。

「先日、重大な歴史変動が確認された。明らかに過去の改変がなされた結果だ。時速十年の速度で歴史が塗り替えられている。およそ半年で変動が我々の時代に追いつき、我々は初めから存在しなかつたことになってしまふ。しかもこの変動は、人類の住む全ての銀河におよんでいる」

「はあ？ って、まさか、人類史全てが影響を受けてるって言うんですか」

専門家たるゲイルをして、啞然とさせる事態だった。これほど大規模な変動は、聞いたことも想定したことも無い。

「そつだ。忘れてはいかん。改変は前銀河歴時代に加えられている。たった一つの島宇宙をおさえるだけで全体を変えられる。それも、

決定的な変化をな」

歴史とは、ゴムで編んだ網のようなものだ。一箇所を強引に引っ張れば、周囲に歪みが生じる。引っ張る力が大きければ大きいほど歪みも大きくなるが、千年単位で眺めれば、影響はほとんどおよばない。

ゲイルの仕事は、局所的な歪みを修正し、引っ張った犯人を捕まえることだった。

しかし、今回は勝手が違う。

誰かが歴史の網に切れ目を入れたらしい。そこからゴムの糸がほどこけて、歴史全体が分解しつつある。

なるほど、これは極秘任務になる訳だ。下手に公表したら、確実にパニックだろうな。

内心、溜息をつきたい気分です、ゲイルは本部長の説明を聞き続けました。

第二部 発端（後書き）

さて、連続投稿、どこまで行けますか。

三 歴史学者（前書き）

三 歴史学者

「ことは緊急を要する。あと半年以内に原因を突き止めて排除せねば、我々の世界を取り戻すことは不可能になる。歴史局の調査結果をのんびりまっではおられん。そこで君に頼みたいのだ。

残念ながら歴史変動を受けてしまった時代では、時間管制局そのものが消滅している。というより、誕生しなかったことになっている。したがって、局員はどんどん消滅していくし、各時代支部を基地として使うこともできん。

時間管制官と名乗っても、そんなもの存在していないのだから、いつもの特権を受ける事さえできないだろう。まして前銀河歴時代だ。秘密保護規定は厳しく守られねばならん。ここでは大したことのないものでも、奇跡と受け止められかねん。

どうせ修正してしまうから何をしても構わないと言えば構わないが、下手に騒ぎが起きると影響がどこまで及ぶか予測がつかん。救世主扱いされた揚句、宗教戦争の台風の目に祭り上げられたりしたら、捜査どころではなくなるからな」

ゲイルが溜息をついた。

「よくそれだけ気落ちすることを並べられますね。分かりました。宇宙歴八〇〇年に跳びましょう。そこが変動の震源地なんです。ただ、守るべき正史が分からなければ、動きのとりようがありません。どうせ、思考データにまとめられてないんでしようから」

「その点は心配ない。君に同行する歴史学者が決まっている。紹介しよう。ルー・イム博士だ」

続き部屋のドアが開き、一人の若者が入って来た。特に鍛えている様子も無く、ごく一般人に見える。

「ルー・イムです。よろしく」

すこし気後れぎみなのは、あまり荒事には関わってきていないからだろう。デスクワークを担当するタイプのような。

「五年前、若返り処置を受けました。今は六十年間の年季奉公中です」

言われて、肩の記章に気付いた。数は一つ。つまり、一度目の若返りを受けたと示している。それだけの功績をあげた重要人物という訳だ。

六十年か。

ゲイルは心の中でつぶやいた。

あと五十五年経てば、お礼奉公から解放され、二度目の人生を享受していることだろう。そのころには壮年に達しているだろうか。業績次第では、再び若返り資格を取っているかも知れない。

黒髪黒目のいかにも学者然とした若者に、ゲイルは軽く会釈した。年長者に対する礼儀である。

ここ中央官庁街においては、見た目と実年齢がかけ離れていてもそう不自然ではない。煙たい本部長など、記章の数は四つもある。単純計算で千歳を超えていてもおかしくないだろう。

むしろ、ゲイルのように一度も若返りを受けず、若い外見のままベテランの域に達している者の方が珍しい。

「では、必要な打ち合わせをして出発したまえ。幸運を祈る」

本部長に言われるまでも無く、今回は多大な幸運を必要としそうだった。

三 歴史学者（後書き）

いきなり間があきました。やっぱり連投は難しいです。
うっ、毎日の残業さえ無ければ……。

四 初動捜査 1

ゲイル・アベイは、独立商人を装うことにした。いつの時代でも、旅行者として潜入するのが時間管制官の常套手段である。

些細な習慣の違いや常識の無知を誤魔化せるのが最大の利点だが、今回はルー・イム博士のための役割を見つけないければならない。

「あなたには、私の船の乗客ということになってもらいましょう。研究のために来た学者ということだ」

ルー・イムは大きく頷いた。

彼は古代歴史調査局に所属する歴史学者だ。捜査官には向いていないという自覚がある。演技力からはつきし、他の役割をこなせる見込みはゼロだった。それでも、他に人が居ない以上、人選の余地はない。

銀河歴時代なら、その時代に同化して調査を続けている有能な捜査官がいくらでも居るのだが、宇宙歴時代となると専門家はぐっと少なくなる。中でも銀河帝国歴時代を専門としているのは、彼一人だった。

「いえ、時間管制局成立直後の時代支部には私よりずっと優秀な専門家が居るんですが、歴史変動で消滅してしまっただけ……」

他人ごとでは無かった。なんとかしなければ、あと半年で、ゲイル・アベイもルー・イムも実現しなかった可能性として泡より儂く消えてしまう。

既に変動の及んだ時代の出身者達が、次々と消滅している。事件の発覚のきっかけは、出張して来ていた過去出身者の消滅だったそうだ。

取り敢えず、彼等は宇宙歴八三〇年に跳ぶことにした。正史と歴史変動との差異を調べ、原因を特定するためである。

時航機タイムマシンを組み込んだ商船『メリー・バード』をか駆り、人類発祥の島宇宙、第一銀河系に到達すると、一路、惑星フェザーンを目指したのだった。

「そんな、馬鹿な」

ルー・イムの取り乱しようは、傍で見ている気が毒になるほどだった。

時間管制官で固めた商船メリー・バードの客室で、立体TVや電子新聞のニュースを片っ端から検索して、「こんな筈は無い、狂ってる、どうなってるんだ」の三語を連発している。

「どこが狂っているのか、説明していただけませんか」

少しは歴史学者が落ち着くのを待って、ゲイルが声をかけた。

ゲイルにしてみれば、歴史変動が起きているのだから正史とずれていて当たり前なのだが、ルー・イムにとってはショックが大きいらしい。

「ハイネセン共和政府が成立していない。ヤン・ウェンリー大学も創立されていない。ヤン・ウェンリー大学が無ければ、長距離ワープ船が開発されないし、宇宙歴千年代の科学的発展だって足踏みする。島宇宙間交通が実現しないかもしれない。

第一、ハイネセン共和政府抜きでヤン・ウェンリー主義が広まる

のか。辺境開拓地の独立運動が起きなければ、銀河帝国崩壊はどうなるんだ」

始めて聞く固有名詞ばかりだったが、ゲイルは事の重大さをきちんと認識していた。

「つまり、そのハイネセン共和政府とやんなんとか大学がポイントなんですね。その二つは、正史だと何年に成立することになるんです？」

「ヤン・ウエンリー大学だよ、君。ハイネセン共和政府は八〇一年にヤン・ウエンリーの未亡人フレデリカ・グリーンヒル・ヤンと、養子のユリアン・ミンツによって建国されるんだ。ヤン・ウエンリー大学は、八一年、ユリアン・ミンツが創立する」
「なるほど」

ゲイルが頷いた時、船内通信のコール音が響いた。

「ゲイルだ。どうした」

「地上のコンピューターネットと接続完了しました。データベースはフェザーン中央情報サービスと中央図書館、それに通信同盟の三つです。そちらのコンピューターで呼び出せます」

「ありがとうございます！」

咳き込む勢いで返事したのは、ルー・イムだった。そのままコンピューターのディスプレイにかじりついて、情報収集に没頭する。ゲイルが背後から覗き込んでも、気にもとめない。

「これだ」

タッチパネルの上で跳ねまわっていた博士の指が急停止した。

ゲイルは覚えたばかりの銀河帝国語の知識を総動員して、ディスプレイの文字を追った。

フレデリカ・グリーンヒル・ヤン

宇宙歴七七四年、後に救国軍事会議議長となったドワイト・グリーンヒル大将の長女として生まれる。

七九六、ヤン・ウエンリー少将の副官を拝命。

七九九、ヤン・ウエンリーと結婚。
八〇〇、ヤン・ウエンリー暗殺未遂事件にて死亡。

「ヤン・ウエンリーは八〇〇年、地球教徒により暗殺されたはずなんだ。そして残された未亡人がハイネセン共和国を樹立する。ところが、この変動した歴史じゃ生死が逆になってる」

ゲイルは納得しがたいものを感じた。

「政府なんてものは、一人の人間が死んだくらいでは動きませんよ。動いたとしても一時的なもので、そう、放っておいても二百年もすれば、歴史の歪みは自然に修復されてしまう。今起こっているような大変動に結びつくとは思えません」

「君、君、ヤン・ウエンリーなんだぞ。一人の人間なんて言葉で片付けなくてもいい。彼が死なずに皇帝ラインハルトとの二度目の会談を成功させていたら……」

歴史学者は一人で興奮して、再びディスプレイに没頭していった。

ゲイルは肩をすくめて部屋を出た。

どの道この時代では、彼の出る幕は無い。歴史学者に正史と歴史変動とのズレを確認してもらい、ついでに修正に必要な時点と方法も見つけてもらうだけだ。それさえ分かれば、後はゲイルの仕事である。

自室に戻ったゲイルは、ヤン・ウエンリーについて調べてみることにした。宇宙歴八〇〇年に死んだはずなのに、この世界では生き延びてしまった人物だ。

未来から持ち込んだ資料には、当然のことながら正史における八

〇〇年までの経歴しか載っていない。

それでも、かなりの確率で自分の手で殺すことになる相手の歴史的立場を、いささかなりと把握しておきたかったのである。

六 初動捜査 3

ゲイルの私室へ報告に訪れた歴史学者は、すっかり落ち着きを取り戻していた。

「やはりポイントは、ヤン・ウエンリー暗殺事件ですな。八〇〇年前半にイゼルローン回廊で戦われた帝国軍とヤン・ウエンリー軍の会戦までは、正史通りに推移している。停戦後、皇帝ラインハルトとの会談に臨むため、ヤン・ウエンリーは巡航艦レダ？号でイゼルローン要塞を離れ、帝国軍に偽装した地球教徒の団に襲撃されている」

ルー・イム博士は言葉を切ると、テーブルの上の二冊の本を、両手で押さえた。

それはどちらも同じ題名だった。ダスティ・アッテンボロー著『革命戦争の回想』である。

「正史では救援が間に合わず、ヤン・ウエンリーはブラスターで左足を撃たれ、出血死しています。しかし、こちらでは……………」

ルー・イム博士が、歴史変動を被っている世界で手に入れた方の本を開いた。しおりの挟まれたページに、幾本も傍線が引かれているのが見て取れた。

ゲイルは直接情報を得るために直接本を読もうとしたが、すぐギブアップした。自分で文章を目で追うより、朗読してもらった方がずっと早かったからだ。

この時代では思考データを直接脳に送り込むことなど不可能だし、文章音読機でさえ、時間管理局の秘密保持規定に引っ掛かってしまう。まったく不便でしかたなかった。

……ユリアン・ミンツが発見したのは、血の海に倒れている二つの遺体と、その傍らで座り込んでいるヤン元帥だった。

遺体のうち一つは帝国軍服を着用しており、もう一つは、フレデリカ・グリーン・ヒルのものだった。

……我々は、こうむった被害のあまりの大きさに愕然となった。むろん、エル・ファシル革命政権の代表であったロムスキー氏の死は政略上の痛手であったが、ヤン艦隊の副官と副参謀長、および薔薇の騎士連隊長代理を失ったことは、比較にならないほどの衝撃だった。

特にヤン・ウェンリー個人にとって、その喪失感はあまりに大きかった。彼はわずか一年余りの新婚生活の中断を余儀なくされたのだ。

先の戦いで戦死したフィッシャー中将と並んで、グリーンヒル少佐は、第十三艦隊結成以来、ヤン司令官の能力を艦隊の戦力に変換するために必要不可欠な存在だった。

発電所がいかに優秀であろうと、変電所が停止していたのでは送電出来ない。おまけに発電所が仕事を放棄してしまったのでは、停電復旧の見込みすら立たなかった。

……艦隊の戦力が壊滅的な打撃を受けた以上、帝国軍と再戦など問題外だった。どうしても皇帝との会見を成功させ、講和に持ち込まなければならぬ。

もともとロムスキー革命政府首席は大して頼りにならなかったが、急遽代理を務める事になったポポフ氏は形式を整えるための領き人形でしかなかった。皇帝と対等に交渉しうるのは我らが元帥閣下を

置いて他に無かったし、帝国側が他者を交渉相手に認めるとは、到底思えなかった。

肝心のヤン・ウエンリーを悲嘆の海溝の底からサルベージすべく、我々は無い知恵を絞って会議を開き、イゼルローン要塞における事実上の最高権力者の力を借りることにした。

七 悲嘆（前書き）

原作を御存じない方へ。

ヤン・ウエンリーは、イゼルローン要塞司令官兼、イゼルローン駐留艦隊司令官です。文句無しの最高権力者です。

でも、日常業務においては、デスクワークの達人キャゼル又中將に頭が上がりません。

キャゼル又中將は中將で、家庭において夫人に頭が上がりません。事実上のイゼルローンの最高実力者が専業主婦という事実は、要塞上層部において、自明の理となっております（笑）

七 悲嘆

ユリアン・ミンツとオルタンス・キャゼルヌが連れだつてヤンの私室に入った時、アルコールの霧に包まれたように感じた。

空になったブランデーの瓶が、半ダースばかり床に転がっている。その先に、ユリアンの初めてみるヤンの姿があった。

「ヤン提督……………」

テーブルに突っ伏したヤンが、のろのろと顔を上げた。無精髭が伸び、その目は焦点を結んでいなかった。

「ヤン提督、もう、お酒はお止めください」

無言のまま来訪者を見上げるヤンを、ユリアンは正視できなかった。

魂が死んでしまった抜け殻。人生の敗戦者。

戦争の芸術家の不敵な面影は、微塵も残っていない。

アレックス・キャゼルヌ中將の夫人が、静かにテーブルへ近付いてヤンの傍らに座った。

「もう充分ですわ。お酒に逃げても、何の解決にもならないことは良く分つたでしょう。さあ、現実に戻る時間ですよ」

ヤンの視線が、キャゼルヌ夫人とブランデーの瓶の間を往復した。ユリアンの手が伸びて、瓶をテーブルの上から持ち去った。ヤンの目は、無感動にそれを追った。

無言のまま、時間が固定化したようだった。キャゼルヌ夫人は身動き一つせず、ただ、じつとヤンを見つめている。

息苦しさに耐えきれなくなったユリアンが何か言おうとした時、ヤンが初めて口を開いた。

「死なせてしまった」

沈痛さが部屋を占拠した。失われてはならないものを失った巨大な喪失感が、人間を押しつぶそうとのしかかってくる。

自分の無力を感じながら、ユリアンはそれを押し返そうとした。ヤン・ウェンリーを潰させる訳にはいかないのだ。

「私がちゃんと射撃ができれば。私が守らなきゃいけなかったのに……………」

ヤンの言葉は、そのままユリアンの言葉だった。

盾となってヤンを守る役は、僕が演じるはずだった。フレデリカさんは守られる側にいるべき人だった。なのに……………。

後悔と呼ぶには重すぎるものが、改めてヤンとユリアンにのしかかって来た。

「ヤンさん、あなたがこのまま自分を殺してしまつたら、全てが無駄になってしまいますよ。どんなに辛くとも、生き残った者は責任を果たさなければならぬんです。フレデリカさんが命をかけて守ろうとしたものは何か、考えてくださいな」

キャゼルヌ夫人の声は決して大きくなかったが、ちゃんとヤンに届いていた。

「いつそ死ねたら、どんなに楽か……」

「提督！」

「ユリアン、私は救いようのない人間だよ。何百人もの人間を死なせて、何百人も遺族をつくってきたのに、自分がその立場にならなきゃ本当の痛みを理解出来ないんだから。私は、私は……」

不意に、ヤンの瞳から涙があふれた。フレデリカの死後、機能を無くしていた涙腺が、ようやく回復したのだった。

子供のようにしゃくりあげ続ける青年の背を、キャゼルヌ夫人が母親のようにさすった。

彼女はユリアンに、もう大丈夫、涙は悲しみを洗い流してくれるわと、言葉にならない言葉で告げていた。

八 初動捜査 4 (前書き)

短いですが、キリが良いので今日はここまで。

まだまだ伏線張りが続きます。うん、説明くさいけど、ちゃんと書いとかないと後で困るので(^^ゞ

八 初動捜査 4

……ユリアン・ミンツを副官に任命した件について、最も懸念を表明したのはヤン提督自身であった。公私混同について不平をならしたのだが、彼に同調する者は、少なくとも幕僚の中にはいなかった。

彼は若すぎるほど若かったが、既に中尉の階級を得ており、これはフレデリカ・グリーンヒル女史が初代の副官に就任した時と同じであった。さらに無任所参謀として司令部の一画に席を占め、ささやかながら実績もあつた。

……ある意味でユリアン・ミンツはヤン・ウエンリーの最大の側近であり、彼の精神と完全に同調することができた。未熟ながらも、彼の有能さと将来性は万人が認めていた。

あるいは錯覚かも知れなかったが、黒髪の魔術師の隣に立つ少年は、彼の師父を超える天才型の人間に見えた。

もっとも、外見だけで言えば、大抵の人間はヤン・ウエンリーよりも有能に見えたものだが。

ルー・イムは言葉を切つて、回想録を閉じた。

つい内容に引き込まれて、必要以上に読み上げていたことに気付いたのだ。

ゲイル・アベイもその点に気付いたが、苦情を言う気にはなれなかった。正直に言つと、もっと読んで欲しかったほどだ。

それは「実現しなかった歴史の可能性」の本であり、ゲイルが無事に歴史変動を修正してしまえば、この世界から消滅するのが定めだった。時間旅行者であるゲイル達の記憶にしか残らない。

もつたいたいと思わないでもないが、消滅を回避しようとするれば、ゲイルとゲイルの所属する世界の方が消滅してしまう。もつたいたいと感想を漏らす者も居なくなる道理だ。

「この後、ヤン元帥一行は、無事に皇帝ラインハルトとの会談を成功させています。我々の世界のハイネセン共和政府の代わりに、エル・ファシル共和政府が成立し、正史より一年早く平和が訪れます。そして皇帝ラインハルトの死後、ヤン・ウエンリーはフェザーンにおいて、重要な役回りを果たすこととなります」

ルー・イムは、歴史変動の結果を、淡々と説明し続けた。

九 レタ?へ(前書き)

更新、お待たせしました。執筆時間と残業との闘い、頑張ってます。

九 レダ？へ

時間管理局が用意した宇宙船「メリーバード」は、商船に偽装されている。といても、外装だけだ。中身は時代錯誤もいいところ、未来の文物であふれかえっていた。

大会戦が一時的に中断しているとはいえ、未だ戦場であるイゼルローン回廊は、当然のことながら民間船は進入禁止になっている。軍の哨戒部隊に見つかれば、問答無用で拿捕されてしまう。これではまずいのではないかと、ルー・イム博士は落ち着かない思いをしていた。

「致死量を越えた毒は、いくら食べても同じこと、だそうですね」

数万年規模の時間跳躍を可能にする時航機タイムマシンはそれなりに高張る大きさで、どう頑張っても隠蔽できない。船内に侵入されたら、この船が普通ではないとすぐにバレてしまう。どうせ隠せないなら、おっぴらに持ち込んだって同じことだ。

「はあ」

「なに、そう心配することはありませんよ。宇宙は広いですからね。通常の航路を外れれば、まず誰にも見つかりません。見つかりそうになったら、小規模の時間跳躍をすればそれまでです。過去までは追ってこれませんから」

そう、臨検など問題にならない。難しいのは、八〇〇年にレダ？号の占めていた空間を精確に割り出すことだった。正確だけでも精密だけでも不足なのだ。

レダ？号は静止していたわけではない。ほぼ亜光速で航行していたはずである。さらに時差の存在は、銀河系全体の回転運動による移動誤差修正の必要を生じさせる。

超小型の探査機を八〇〇年六月一日に送り込み、レダ？号を起点とした天体図を作成して結果を出すまでに、フェザーン出立から二ヶ月を要した。

通常の時間管制任務であれば、いくら時間をかけようと問題ない。かかった分だけ過去に戻ればそれで済む。しかし今回は違う。

あと四ヶ月弱がゲイル・アベイの生体時間に加われれば、歴史変動が彼の時代まで及んで、その出身者達は消滅してしまうことになる。

タイム・リミットを意識しながらの活動は、「メリー・バード」に乗り組んでいる時間管制局員達に、精神的な消耗を強いていた。

レダ？号航路を忠実に辿る「メリー・バード」の中で、ゲイルはスペーススーツに身をかためていた。これからレダ？号のなかへ跳ぶのだ。

「どうしてそんなに面倒な事をするんです」

時間跳躍について詳しくないルー・イム博士が尋ねた時、ゲイルはこの部外者に、丁寧に説明したものだ。

「いいですか、博士。時航機ごと時間流の中を移動するのは大したことじゃありません。あなたも何度か経験された通りです。しかし、ヤン・ウェンリー暗殺事件の真つただ中にメリー・バードが登場したらどうなります」

数秒の沈黙の後、歴史学者は答を見つけた。

「歴史が変わってしまっ」

「その通り。だから、私一人を跳ばすんですよ。混乱の渦中なら、よそ者が紛れ込んでいても気付かれずに済みますから。ただ、レダ？号に時航機が有るはず無いので、あらかじめここに戻るようにセツトしておくんです。そのために、レダ？号と「メリー・バード」が同一空間に位置する必要があるんです。分かりますか」

「ええ、分かったと思います」

ルー・イム博士は最後に念を押した。

フレデリカ・グリーンヒル・ヤンの命を救うことと、ヤン・ウェンリーの死亡を確認すること。

「この二つだけは、間違いなくお願いしますよ」

ゲイルは笑顔で請け合い、博士を安心させてやった。だが、実際は、ゲイルの方が誰かに成功を請け合って欲しい気分だった。

まだ、歴史変動の犯人は判明していないのだ。どんな妨害が犯人からあるか、予断を許さなかった。

九 レタ?へ(後書き)

取引先が、テレビのCMを全国ネットで流しました。

うん、テレビに自分の関わった製品が流れる日が来ようとは……

…。

十 自殺（前書き）

今回からゲイル君の試行錯誤が始まります。頑張れ、タイムパト
ロール（笑）

ちょっと内容が暗めなので、前書きは明るくしてみました。

十 自殺

軽いめまいのような感覚が、現れて消えた。

ゲイルは手早くステルス機能を作動させて透明人間になると、自分が歴史的イベントの舞台に居る事を確認した。既に銃撃戦の音が響いてきている。

ルー・イム博士が確認したフレデリカ・グリーンヒル・ヤンの死亡場所、B31通路へ移動し、待機する。ほどなく、暗殺者の姿を確認できた。

帝国軍の兵士に変装した地球教徒だ。目を血走らせ、明らかに逆上している。

ゲイルは暗殺者の背後から離れず、当事者二人が現れるのを待った。

来た。

小走りに、二人並んで来る。

「ヤン提督!?!」

暗殺者の誰何の声に乗って、ブラスターのトリガーがひかれた。

第一撃が外れたのは、ゲイルが暗殺者の腕を後から払ったからだ。次の瞬間。ヤンを体ごと突き飛ばしたフレデリカが、ブラスターを撃ち返した。

暗殺者の体が仰け反るようにはじかれる。

明らかに即死だ。何が起きたか悟る暇も無かったろう。

しまった、ヤンはまだ生きています。

ゲイルは、足下に倒れている男の手からブラスターをもぎ取った。

フレデリカが、ヤンの手を取り立ちあがらせようとしている。

「ありがとう、フレデリカ」

アナタハ、ココデ、シナナケレバ ナラナイ。

ゲイルが人差し指に力を込めた。

「あなたっ」

フレデリカが叫んだ。

ゲイルは暗殺者の手元にブラスターを放り出すと、素早く立ち位置を変えた。

ヤンは妻に手を取られたまま、信じられないという表情で、ゆっくりと床に沈んだ。

「あなた、しっかりしてっ」

応えは無かった。

ゲイルは後味の悪さを感じながら、それでも二人から目を離さなかった。

歴史変動の犯人はどこにいる？ 歴史を修正されたまま、黙って引き下がる気か。

「ヤン提督、どこにおいでです」

若い声がこだました。遅れて、同盟軍の装甲服が現れた。ユリアン・ミンツが救援に駆け付けたのだ。

ゲイルが若者に視線を移した瞬間、くぐもった音が響いた。犯人か。

ゲイルは反射的に振り返り、愕然とした。

フレデリカがヤンの上に折り重なっている。その手は、自らのこめかみに銃口を押し当てたままだ。

自殺。そんな馬鹿な。

歴史が、歴史が……

…。

十 自殺（後書き）

今回は、文章を短めにしました。細切れの短文を重ねると緊迫感が出て………いるかな（^^^^）

十一 困惑

ダステイ・アッテンボロー著

革命戦争の回想より

……ユリアン・ミンツが発見したのは、血の海に倒れている二つの遺体だった。そのうちの一つは帝国軍の軍服を着ており、残る二つはヤン夫妻のものだった。

……我々はこうむった被害のあまりの大きさに愕然となった。

むろん、エル・ファシル革命政権の代表であったロムスキー氏の死は政略上の痛手であったが、ヤン・ウエンリーの死はそんなものを覆ませてしまった。

我々は彼一人に頼り切っていた。彼が居なければエル・ファシル革命予備軍など烏合の衆でしかなく、強大な帝国軍にとつてい太刀打ちできるはずもなかった。

戦う理由も、戦う方法も、戦った後のことも、全てヤン・ウエンリーが考えてくれていた。

つまり、ヤン元帥は我々の頭脳そのものであり、頭脳を失ったヤン艦隊は、脳死してしまったのだ。

……その瞬間から、我々は滅亡の道を辿り始めた。

残された我々の中で一番幸福だったのは、精神崩壊を起こして病院に収容されたユリアン・ミンツだっただろう。彼は、ヤン・ウエンリーが守ろうとした民主共和制度が宇宙から跡形も無く消滅してしまう有様を、見ずに済んだのだから。

出来る事なら、私も狂ってしまったかった。絶望の海に溺れた我々は、必死に岸を探してそれを得られず、一人、また一人と海底へ沈んでいった。

彼等は焦っていた。

時間が無い。何としてでも歴史を修正しなければならない。もはや手段を選んでいる余裕は無かった。

「フレデリカ・ヤンを、ヤン・ウエンリー暗殺現場に居合わせてはならない。どう妨害しても、彼女は自殺することになるだろう。時間を置いて知らせなければ、彼女の精神に加わる傷が許容量を超えてしまう」

精神思考医が出した結論に、ゲイル・アベイは考え込んでしまった。

つまり、彼女をレダ？号に乗せないということだ。それはより大きな歴史干渉になる。

「なんだか我々自身が歴史変動を起こそうとしているような気がしてならないんです。ひよつとしたら、フレデリカの死亡する歴史の方が正史なんじゃありませんか」

ゲイルが抑えきれない疑念を打ち明けた相手は、ルー・イム博士

だった。彼は歴史学者だったし、何より時間管理局員ではなかった。

「さあ、どうでしょう。歴史にはいくつも可能性が有るということでしょう。私達にとっては私達の歴史が正史ですよ」

ルー・イム博士の明快な答は、かえってゲイルを困惑させた。

自分達の歴史を守るために過去に干渉するというのでは、結局、ご都合主義、自己中心主義ではないか。

ゲイルはこれまで、過去に干渉しようとした人間を犯罪者として取り締まって来た。中には、悲惨な事故や天災から、家族を救おうとした者も居た。正史を守るために敢えて悲劇を再現する、それがゲイルの仕事だったのだ。

ゲイルが時間管制官として受けた訓練には、時間犯が起こした様々な事件についての知識も当然含まれていた。その結果が行きつく先、修正され、消滅した歴史のあれこれだ。

事故や災害の度に過去を修正することが合法とされた社会が有った。結果は、甘やかされ過保護に育てられた幼児と表現されている。何が有っても過去に戻って修正すれば良い、その甘えが、事故からの教訓や忍耐力の蓄積を阻害した。その上、何を修正すべきかで争いが起こり、どう修正するかの特権を巡って戦争になった。どれほど損害が出ても無かったことに出来るという油断が戦火の悲惨さをエスカレートさせ、とうとう修正作業をする者が残らない人類滅亡を招いた。

また、過去の修正が社会的に認知されていた世界もあった。この世界では、災害を防ぐためという名目で、未来からの来訪者を受け

入れていた。かれらは預言者と呼ばれたが、そのうち、自称預言者が大量に現れて大混乱になった。本来なら起きるかどうかわからないはずの未来の危機を言いたてて私利私欲を貪る輩が蔓延したのだ。最終的には限度を超えた独裁政治によって自壊して果てるまで、時間管制の情報上、最も不幸な時代と呼ばれる惨状が広がった。

それらの不幸な経験を清算し、有るがままの歴史を受け入れるという理念の元成立したのが時間管制局だったはずだ。故に正史は絶対を守るべき聖域、それが大原則だ。

なのに、その正史が、過去への干渉によって成立したものだとしたら。

深刻な疑問を抱えたまま、ゲイルはイゼルローン要塞へ侵入した。宇宙歴八〇〇年五月一八日。回廊の戦いと呼ばれる、ヤン・ウエーリー最後の戦いが終結した直後である。

それは、帰還したヤン艦隊が眠りの精に取りつかれ、要塞中が眠り込んでしまったという伝説の日だった。

十一 困惑（後書き）

感想、ありがとうございます。
頑張りまーす。

十二 イゼルローンへ

イゼルローン要塞プラス二〇二六レベルのD4ブロック。ヤン夫妻の私室の所在地である。

ゲイル・アベイは、人気のない通路を目的地に向かって歩いていった。

同盟軍少佐の軍服を身に着け、身分証明カードと軍籍証書を用意してあるが、どうやらその必要は無かったようだ。警備兵どころか猫の子一匹見当たらない。要塞中が眠り込んでしまったという伝説は、どうやら事実だったらしい。

いささか呆気なく、ゲイルはヤン夫妻の枕元に立っていた。二人とも熟睡していて、ちよっとした物音ぐらいでは起きそうにない。

ゲイルの生体時間でわずか半日前、血の海でことくれたはずの二人だ。

時間管制業務につきものの違和感を無視しながら、ゲイルは手早く処置をした。

まず、この時代にはまだ存在していない万能予防注射薬を、ヤンの首筋に高圧注入した。これで彼はどんな病気にも罹らなくなる。死ぬまでのわずかな期間でしかないが。

次に、インフルエンザのウイルスをヤン夫人の鼻腔内に吹き付けた。潜伏期間はおよそ五日、ヤンがレダ？号で旅立つころには、高熱を出しているだろう。

何も知らずに眠っている二人に、ゲイルは最後の一瞥を投げた。

貴方方にとって、どれが一番幸福なのだろう。妻が生き残る道、夫が生き残る道、二人とも死亡する道。

不意に、ゲイルは第四の可能性に気付いた。

もし、二人とも生き残ったら？

慌てて頭を振ると、不穏当な考えを振り払った。仮定の歴史を夢想することは、時間管制官には許されない贅沢だ。

再びレダ？号の精確な位置を特定するために、貴重な時間が費やされた。でかぶつのイゼルローン要塞とちがい、ちつぽけな宇宙船を短期間で捕捉するのは、未来の技術をもってしても困難だ。

歴史変動が「メリーバード」の出身時間におよぶわずか二日前、ゲイルはレダ？号へ跳ぶことができた。

目的はヤン・ウエンリーの死亡を確認することと、歴史変動を引き起こした犯人の手掛かりを得ること、この二つである。

ヤン・ウエンリーがどこで死亡したのか、正確な位置情報を入手出来なかったので、ゲイルは士官倶楽部の裏口で待ち伏せすることにした。もちろん、ステルスフィールドで透明人間になっている。

ほどなく、ブラスターの発射音が入り乱れ、裏口からヤンが放り出された。ゲイルはヤンと付かず離れず、短い逃避行に出発した。

生命の危機だと言うのに、ヤンは慌てたり走り回ったりしなかった。時々立ち止まっては腕を組んで考え込み、向きを変えては歩き

出す。相変わらず、一向に偉そうには見えない。

ゲイルは心の中で、傍らのヤンに話しかけていた。

不思議な人だ、貴方は。歴史の鍵を握っているのに、それを使いたがらないなんて。貴方に歴史のために死んでくれと頼んだら、どう答えてくれますか。

『あんまり死にたくないけど仕方ないかな』　そう返事する姿が想像できてしまった。

十二 イゼルローンへ（後書き）

あと、後一話だ。一話でもう一つの歴史編に突入できるんだ。だからゲイル君、もうちょっと悩んでね（笑）

十三 迷い（前書き）

今回の話の最後に、プロローグを読み直していただけますよう、
お願いします。
ちよこつとかぶっておりますので。

十三 迷い

この任務に就いてからわずかばかりの時間で、ゲイル・アベイはヤン・ウェンリーという人物を、出来る限り研究してきた。

ルー・イム博士は、ヤンのことを「偉大なる矛盾の塊り」とか、「偉大な英雄となった非凡なる凡人」などと表現していた。

隣を歩くヤンの体温を感じながら、ゲイルは同僚の言葉を実感した。

彼は確かに『奇跡のヤン』だ。これほどユニークな個性が歴史上に存在すること自体、奇跡ではないか。

ゲイルは妙に自信が無くなるのを感じていた。

……………自分はこの男を殺せるだろうか……………

既に別の歴史の流れの中で、彼はヤンをその手で撃っていた。その時は、それが唯一の正しい道だと信じていた。疑う理由も無かった。

しかし、今は……………。

ゲイルの目に、暗殺者の姿が跳び込んだ。フレデリカに撃たれて死んだ、あの男。

ゲイルが小走りに暗殺者へ近付いた。目を血走らせた男が、ブラスターを構える。

「ヤン・ウエンリー提督!？」

無意識のうちに、ゲイルの手が暗殺者に伸びた。はっと気付いて引っ込めようとした時、ゲイルの手とブラスターがぶつかった。ほとんど同時に、ブラスターの発射音が響いた。

「殺した、殺したあ」

調子外れの声をたてながら、男は踊るような足取りで去って行った。どう見ても正気ではなかった。

ヤンは立って居られずに、壁に背を付けた。そのままズルズルと座り込む。

ズキズキと痛む左足を見下ろすと、血がにじんでいた。応急処置のマニニアル通り、軍服のスカーフを外して傷口の上から巻きつけ、ギョツと縛る。

そこまでして、ほっと息を吐いた。出血は大したことなく、スカーフにわずかばかり浸み出したただけだ。

ヤンの行動を見たゲイルは、愕然としていた。それは、フレデリカの自殺を確認した時以上の驚愕だった。

ヤン・ウエンリーが致命傷を受けていない! 自分がブラスターの軌道を逸らしてしまった!

ゲイルは越えてはならない一線を越えてしまった。事故とは言え、歴史を守るはずの彼が歴史変動の原因になってしまったのだ。

もはや、ゲイルには全てをやり直すだけの生体時間が残されていなかった。

この場で決着をつけるしかない。ユリアン・ミンツが駆け付けてくるまでに、自分の手でヤン・ウエンリーを殺さなければならぬ。

ゲイルは、自分が何を為すべきか分かっていて、分かっていながら出来そうになかった。自分に代わって判断を下してくれる存在を求め……最大の当事者に話しかけることにした。

『ヤン・ウエンリー、私はゲイル・アベイ』

『どうか聞いてくれ、私は、ヤン・ウエンリーがここで死んだ未来から来た』

『選んでくれ、どちらの未来を選ぶか』

『どちら、と言つとっ』

ゲイルは敢えて単純化して話した。都合の良い事だけを強調し、そうでないことは教えない。ヤンの決断を誘導していると分かっている。アン・フェアだと自覚しながら、そうせざるを得なかった。

ゲイルは時間管制官、歴史を修正する義務があった。

ヤンの死後、残されたフレデリカ・グリーンヒル・ヤンとユリアン・ミンツがハイネセン共和政府を樹立する道。

そしてもう一つの道は……。

十三 迷い（後書き）

はい、ようやくプロローグのシーンに追いつきました。これにて前振り終了です。

いや、長かった（笑）

次話から、もう一つの歴史編に入ります。うん、やっぱりヤン・ウェンリー主役の方が話がはずみまーす。

十四 もう一つの歴史へ（前書き）

さてさて、ようやくヤン提督主演の物語が始まります。と言っても、今回は名前しか出ていませんが（笑）
ちょっと短めスタートです。

十四 もう一つの歴史へ

宇宙歴八〇一年、新帝国歴三年、六月。

ヴェルゼーデ仮皇宮は、沈痛な空気に包まれていた。

この年二十五歳になったばかりの主が死病に侵され、その身を寝台に横たえている。豪華な金髪とアイスブルーの瞳を持つ美貌の若者は、名をラインハルト・フォン・ローエングラムと言った。

枕元には、二人の美女が控えている。皇妃ヒルデガルド・フォン・ローエングラム、皇帝の姉にあたるアンネローゼ・フォン・グリューネワルト、今現在、全銀河で最高位の女性達だ。

ヒルデガルド、通称ヒルダの腕の中には、生まれたばかりの赤子が抱かれている。アレク大公こと、アレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエングラム。間もなく全人類の皇帝となるべく運命づけられた、宇宙で最も有名な赤ん坊だった。

「陛下、エル・ファシル共和自治政府の使節団がフェザーンに到着したと、報告が参っております」

皇帝の高級副官シュトライト中将が、声をひそめて報告した。

皇子誕生の報が宇宙に歓喜の風を吹き渡らせた時、皇帝の病状はまだ表面に顕れておらず、過労による発熱が時として周囲を心配させるにとどまっていた。遠路はるばるやって来た使節達も、まさか誕生祝いが病気見舞いに代ろうとは予想していなかっただろう。

ラインハルトが、ベッドの上で上半身を起こした。すかさず女性達が、その背にクッションをあてがって体を支える。

それへと体重を預ける姿は、痛々しいほどにやつれて見えた。元

々が活気に溢れていただけに、その落差がひどく目立つ。

「あの男も来たのか」

シュトライトには、『あの男』が誰であるか、問い返すまでも無く分かってた。

「はい。ヤン・ウエンリー元帥とホワン・ルイ共和自治政府主席のお二人が、使節団の代表でいらっしやいます」

「そうか、ヤン・ウエンリーが来てくれたか」

ラインハルトの顔に微笑が浮かんで消えた。そのまま、何か考える表情になる。

「シュトライト、皆を集めてくれ。それと、エル・ファシルの使節を呼ぶように」

「はっ」

シュトライト中将は、足音さえひそめて皇帝の寝室を辞した。

十五 ブランデー入り紅茶と紅茶入りブランデーの間

仮皇宮から徒歩十分の距離にあるベルンカステル・ホテル。格で言えば中の上から上の下あたり、裕福な商人や大手企業の幹部、地方の有力者御用達であり、現在はエル・ファシル使節団の投宿先だった。

使節団のメンバーは、旧自由惑星同盟の最高評議会議員だったこともあるホワン・ルイ共和自治政府主席、随行してきた政府高官六人、退役元帥ヤン・ウェンリー、ヤンの二代目の副官を務めた退役中尉ユリアン・ミンツ、護衛役を務める退役中将ワルター・フォン・シェーンコップ、合計十名だ。

ホテルの周囲を一個中隊の帝国軍陸戦兵が『警備』しているのは、それ相応の訳がある。

なにしろ、ヤン・ウェンリーはつい一年前まで帝国最大の公敵だったのだ。比類なき天才であるはずの皇帝ラインハルトに一步も引けをとらず、名將ぞろいの帝国軍の将帥に軒並み敗戦の苦杯をなめさせた男だ。

その上、シェーンコップ中將が同行している。

彼は、自由惑星同盟軍において勇猛さで右に出る者なしと言われた薔薇の騎士連隊の隊長として、また、イゼルローン要塞の防衛指揮官として勇名を馳せた男である。ヤン・ウェンリー奪回のため、同盟首都ハイネセンで華々しい市街戦を繰り広げた件は、まだ記憶に新しい。

帝国軍が神経質になるのも、無理のないことだった。

「ずいぶん仰々しいことだな。そんなに危険人物だと思われる

のかな」

他人事のような顔をしてティーカップに口をつけたのがヤン・ウエンリー。

どう見ても元帥という階級が似合うようには見えない。軍服を着てさえ軍人に見えないことで有名だった人物だが、私服だと、ぼつとした青年としか形容のしようがない。

三十四歳になったばかりだが、外見はさらに若く、使節団の中では一番の下っ端に見える。十九歳のユリアン・ミンツでさえ、ヤンよりはずつと貫禄が有った。

「しかたありませんよ。彼らが警戒するのも当然だと思いますが」
ユリアンが、テーブルの上のブランデーの瓶をさり気無く片付けながら言った。

「やれやれ、虚名は何時までもまとわりつくか。かいかぶるのもいい加減にして欲しいものだ。なんて悲惨な人生なんだろう」

後半の台詞は、ユリアンの手で持ち去られつつある酒瓶に視線を送りながら発したものだ。

「なあ、紅茶に入れるくらい、大した量じゃないよ。それくらい自由に飲ませてくれないかな」

「いけません。もう三杯もお代わりなさったでしょう。紅茶入りブランデーを」

七年前からヤンの養子になっているユリアンにとって、増え続けるヤンの酒量をいかに抑えるかは、頭の痛い問題だった。軍人時代は戦闘が終わるたびに増えていたものだが、一年前妻を亡くしてからは一気に増えてしまい、本気でヤンの体を心配しなければならな

くなくなった。

一方でヤンの気持ちが分かるから、あまり強い事を言いたくないのだ。ユリアン自身、淡い憧れを寄せていたフレデリカがヤンの盾となつて死んだとき、飲まずには居られなかったのだから。

ヤンがブランディーを確保すべく反論しようとした時、帝国からの使者の来訪が告げられた。

驚いたことに、使者は皇帝の義父にあたるマリィンドルフ伯爵本人だった。

皇帝妃の父親であり國務尚書を務める伯爵は、文句無しの帝国の要人である。善良で誠実という人物評は、旧同盟領でも良く知られていた。これ以上、謀略の心配の無い人選は望めないだろう。

ヴェルゼーデ仮皇宮へおいで頂きたいとの要請を受けて、使節団の一行は、差し向けられた地上車にためらい無く乗り込むことが出来た。

十五 ブランデー入り紅茶と紅茶入りブランデーの間（後書き）

あれ、なんか皇帝ヤンのお話のシーンに似ているな、と思った貴方。大正解です。

ただし、元ネタはこっちの方。

シェーンコップをお供に連れて行ったらとんでもない展開になっちゃいました。その反省から、皇帝ヤンでは、ユリアンだけを連れて行くことにしたんですよねー。

今回は、皇帝の寝室からお送りします。

十六 謁見 1 (前書き)

お待たせしました。今年の風邪は症状が軽いかわり、なかなか治らずしつこいです。

これから冬本番。皆様、御自愛くださいませ。

帝国にとって重要なのは、ヤン・ウエンリー個人だけだった。彼が居なければマリーンドルフ伯爵が使者に立つどころか、そもそも呼び出されることも無かつただろう。

エル・ファシル共和政府などヤンの付属物でしかない。それは厳然たる事実だった。

ホワン・ルイ政府主席が受けたのは、儀礼の範囲を一步も出ないものだった。ヴェルゼーデ仮皇宮での一連の社交辞令が終わると、早々に宿泊先へと帰されてしまった。

後に残されたのは、ヤン・ウエンリーをはじめとする退役軍人三名。皇帝の待つ謁見室へ案内されると、いやでもここから本番だと気付かされた。

そこにはすでに帝国軍の領袖達が参集し、黒と銀の華麗な軍服が威圧感を発していた。いかにも軍事国家らしい有様だ。

三人の元帥と七人の上級大将が、一分の隙もない敬礼をする。三人の客人が、一斉に答礼を返した。

ワルター・フォン・シエーンコップとユリアン・ミンツは、対抗するように胸を張り、表情を引き締めた。

ヤン・ウエンリーはと言うと、いつもの悠然さ………あるいは鈍感さ………を發揮して、正面の皇帝に軽く会釈した。

「お久しぶりです。まずは、お祝いを述べさせていただきます。皇子御誕生、おめでとうございます」

病人用のロボットカーに座ったラインハルトは無言で頷き、ヤン

の祝辞を受け入れた。

「卿は元気そうで何よりだ。余と違うな」

皇帝の言葉は単に事実を述べたものであって、皮肉は含まれていなかった。

「卿に来てもらったのは他でもない。余の死んだ後について話しておきたかったからだ」

緊張したのは話し手でも聞き手でもなく、周囲の方だった。二人の英雄は、むしろ淡々と言葉を交わしていた。

「それほど悪いのですか」

「分からぬ。侍医は病名を付けはしたが、それが何を意味するのかすら理解しておらぬ。あとどれくらい生きて居られるかも分からぬとは、不便なことだ」

「そうですか」

「余が居なくなると、卿を自由の身にしておくことは甚だ危険だ。ここにいる提督達では卿に対抗出来まい。そうであろう」

ヤンの顔に、初めて感情の動きが表れた。

「買い被られては困ります。私には、帝国と事を構えるつもりはありません。第一、今の私では、名将揃いの皆さん方に勝てるはずがありません」

「これは異なることを聞く。これまでは勝つて来たではないか」

ビッテンフェルト、ミユラー、ワーレン、ルッツの各上級大將が、その性格に合わせて顔色を微妙に変化させた。赤、青、白と、なかなかカラフルだ。ヤンの武勲録に名誉ある敗者の名を連ねている身とあっては、平静を保つのもなかなか難しい。

帝国の双壁と呼ばれるミッターマイヤー元帥とロイエンター元帥、それにアイゼナツハ上級大將は、負けはしなかったものの勝つ

たとは言い難い。

メックリンガー上級大將は、ヤンの陽動にまんまと引つ掛かり、戦わずして兵を引いている。

オーベルシュタイン元帥とケスラー上級大將は、幸か不幸か手合わせ願ったことがない。

「それは運が良かったからです。それだけではありませんが、とにかく運が良かった。それに今の私には、指揮すべき兵力がありません」

ヤンの言葉は謙遜ではなく、本心からのものだった。

十六 謁見 1 (後書き)

今年の冬コミ、ゲスト原稿をひとつ書き下ろしました。縁がありましたら見つけてくださいね。皇帝ヤンのお話の番外編です。

十七 謁見 2 (前書き)

わーい、初積雪です。三センチくらい積りました。
今年は屋根の雪下ろし、しなくて済むと良いな。

不敗を誇ったヤン艦隊は、エル・ファシル共和政府成立と同時に解散していた。戦艦と空母を全て破棄し、巡航艦以下の艦船は、武装を解いて民需に転用している。残ったのは、元々エル・ファシルに常駐していた僅かばかりの惑星警備隊のみだ。

「たとえ五万の艦隊があろうと、卿が居なければ恐るるに足りぬ。我らが恐れるは、卿の頭脳のみだ」

ラインハルトの言葉には、からかうような響きがあった。

提督達が納得の表情をしている。なにしろ、奇跡のヤンなのだ。余人には不可能でも、彼ならなんとかしてしまうに違いないと思いがあがる。

ヤンは困惑したまま、ラインハルトに問うた。

「私にどうしろと仰るのですか」

「エル・ファシルから離れてもらおう。卿が居る限り、共和政府を抹殺することになる。余が居なくなれば、そうせざるを得まい。死後のことまで、余は責任を持ちかねるぞ」

ユリアンの顔がこわばった。ラインハルトの率直過ぎる発言は、正確過ぎるほどの的を射ていた。

現在のエル・ファシル共和自治政府は、ヤン・ウエンリーの個人的声望と比類なき皇帝の矜持によって、存続を許されているのだ。

その両方が一度に消えてしまったら。いや、皇帝が亡くなるだけで、危ういバランスが崩れかねない。

ユリアンは知っている。ヤンが権力を求めて自ら戦いを欲するこ

となどあり得ないと。

しかし、ヤンの今までの行動を表面的に見れば、ヤンは帝国に仮想敵と見なされるだろう。なにしろ、自らの属する国家の滅亡後、共和主義者を糾合し、全宇宙相手に互角以上の戦いをしてのけたのだ。

このままでは危険分子として抹殺されかねない。充分、有りそう
な成り行きだった。

「はあ、そう言われましても……………」

ヤンはまるつきり威厳のない返事をし、同盟軍礼服の白ベレー帽を取って、じつとそれを見つめた。本来なら常の癖で黒髪を掻きまわすところだったが、さすがに場所柄を意識したらしい。

まあ、ベレーを脱ぐだけで十分行儀の悪い行為だが。

ミッターマイヤーとロイエンタールが、呆れたような視線を交わした。

二人が直接ヤン・ウェンリーと顔を合わせるの、今回が初めてだ。ミュラーやメックリングーから話は聞いていたが、実物は想像以上の変わり者だった。

と言うより、余りに平凡すぎる印象で、その業績の華々しさとの落差が大きすぎて戸惑ってしまうのだ。

それまで黙って控えていたシェーンコップ中将が、口をはさんだ。帝国貴族の流れをくむ彼の帝国語は、惚れ惚れするほど流暢だった。

「皇帝ラインハルト陛下、お尋ねしてもよろしいでしょうか」
言葉づかいは丁寧だったが、その表情は、不逞と不遜を微妙にミックスしたものだ。

ヤン・ウェンリーは悪い予感がして、ベレーをかぶり直すと、肩越しにシェーンコップをかえりみた。

十八 謁見 3

「卿は？」

「ワルター・フォン・シエーンコップ。お聞き及びであれば光栄の至りですが」

ニヤリと笑った表情には、高貴な人食い虎の風格がある。

ロイエンタール元帥が、興味を込めた目を向けた。

イゼルローン要塞攻防戦のおり、彼はシエーンコップと一対一の白兵戦を演じたことが有る。相手が装甲服を着用していたので、素顔を見るのはこれが初めてだった。

「良かるう。話してみよ」

「エル・ファシルから引き離して、ヤン元帥をどう料理するおつもりですか。共和勢力に対する人質ですか。それとも、いつそ無理心中……………」

「シエーンコップ！」

ヤンの制止を無視して、ヤン・ファミリーの中でも屈指の毒舌かは言葉を続けた。

「……………あるいは、ローエングラム王朝に取り込んでしまいますか」
「無礼なっ」

顔を真っ赤にして怒鳴ったのは、ビットェンフェルトだった。皇帝の御前でなければ飛び掛かっていただろう。

シエーンコップはどこ吹く風というすまた顔である。ヤンは困惑したまま、不埒な部下の代わりに謝った。

「済みません。貴官が怒られるのもつともです」

皇帝が笑い声をあげた。それは久しく絶えていたものだった。心

底愉快そうなそれは、謁見室に突然差しこんだ陽の光のようだった。「ぬけぬけと言う奴だ。このような部下を持つと、さぞかし苦勞が多いだろう」

「はあ、まあ」

芸の無い返事をしながら、ヤンはベレーごと頭を搔いた。元々おさまりの悪い髪が、益々ベレーからはみ出した。

ラインハルトは視線をシェーンコップに戻し、真面目な顔で答えた。

「余としては、卿の言う三番目の選択肢を採りたいものだ。どうだ、卿の上官は二代目の皇帝が勤まると思うか」

皇帝の示した仮定に、驚愕を示さなかったのは二人だけだった。

オーベルシュタイン元帥は、感情を面に出すような人間ではなかった。ヤン・ウェンリーはと言うと、ほけつとした顔で「あ、その策もあるか」と他人ごとのようにつぶやいただけだった。

その声を耳にした一同は、一斉にヤンを注目した。

「今の帝国の実力なら、その必要は無いでしょう。でも、強大な大国に隣接する小国にとっては有効な手段です。そう、後継者を持たない小国が、王族の女性に敵大国の有力者を婿に迎えて国王に迎えた例は古代地球に幾つかあります。」

この場合、新しい国王は第三者ですから、同格の廷臣達の力関係に変動が起きないという利点があります。国王の力も、廷臣達に遠慮したモノになる。さらに、敵国の有力者を見方に出れるのですからその分、敵国を弱体化出来る。上手く行けば、敵国内の勢力基盤をそっくり乗っ取れる。

ただし逆も真なりで、国ごと乗っ取られて、敵国の一地方勢力に組み込まれてしまいかねない。

たとえば、AD一七〇〇年内のブリテン島と言う島で……」

ユリアンは軽い驚きを感じていた。

こんなにヤンが雄弁になるのは珍しい。外見はどうあれ、ラインハルトの前に出て緊張していたのだろうか。とにかく今は、歴史学徒としてのヤン・ウエンリーが表面に出てきている。

十九 謁見 4 (前書き)

今回は切りの良いところで。短めです。

十九 謁見 4

帝国側の驚きは、ユリアン以上だった。

彼等にとつてヤン・ウエンリーは不世出の知将であり、何をしでかすか分からないペテン師だった。生真面目な学生としての一面が存在するなど、想像の外だったのだ。

ラインハルトの言葉に知的好奇心を刺激されたヤンは、どんどん思索の海に足を踏み入れて行った。水深が増すのも気にせず、どんどん潜っていく。

とうとう腕を組んで沈黙考、外界の刺激を感覚から追い出してしまうた。時々、何事かをつぶやくだけである。

「提督、ヤン提督」

ユリアンが控えめな声をかけ、礼服の袖を引っ張った。いくらなんでも時と場所と言うものがある。

「え、何、」

ユリアンに顔を向け、ついで場所柄を思い出したヤンは、さすがに赤面してしまった。

シエーンコップの失笑が響いた。

「皇帝、貴方の提案は御無理ですな。なにしろ我らが元帥閣下は、御覧の通り常識離れた人ですから。能力はあるでしょうが、やる気も無ければ向いてもいない。まあ、軍人だって向いていないのに、嫌々やって、成功したんですから、専制君主も意外と上手く演じられるかも知れませんがね」

「冗談を言わないでくれ、シエーンコップ」

「せつかく憧れの年金生活を手に入れたのに、ですか」

反論しかけて、ヤンは無然としてラインハルトに向き直った。シ
エーンコップを連れてこなければ良かったと、本気で後悔している。

「どうも、お見苦しいところをお見せして、申し訳ありません」

「いや、なかなか面白かった。どうだ、フェザーンへ来る気は無い
か。もはや臣従せよとは言わぬ。滞在してくれるだけで良い」

シエーンコップとユリアンの脳裏に、人質という言葉が浮かんだ。

「考える時間を頂けませんでしょうか」

「良からう。ただし、余り長くは待てぬぞ。余の残り時間は少ない」

皇帝の言葉に、人々は改めて、目前に迫った凶事を思い起こして
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3120x/>

銀河英雄伝説異聞 ヤンとゲイルの物語

2011年12月26日23時52分発行